

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号：62601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04855

研究課題名（和文）伝統的な歌唱を稽古する子どもの歌い方の分析と音楽授業における歌唱モデルの構築

研究課題名（英文）Analysis of Singing of Children Practicing Traditional Singing and Construction of Singing Model in Traditional Singing class

研究代表者

志民 一成（SHITAMI, Kazunari）

国立教育政策研究所・教育課程研究センター研究開発部・教育課程調査官

研究者番号：50320784

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：伝統的な歌唱を稽古する子どもの歌い方の分析では、成人の実演家と比較していわゆるコブシなどの歌い方に大きな差異があること、また、歌う音域の違いが明らかとなった。音楽授業における歌唱モデルの構築では、上記の分析及び考察をもとに、子どもが歌唱している範唱の音源や図形楽譜などの教材を開発した。そして、その教材を用いて、子どもの歌唱の特徴を踏まえた実践を計画し、小学校で検証のための授業を行った。それらの実践では、子どもが歌唱している範唱を用いたことにより、子どもにとって声の使い方や歌い方をつかみやすくなることが示唆された。また歌う際の音域についても、子どもの範唱を用いる効果を確認することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

小・中学校の音楽科授業等において伝統的な歌唱を指導する際に、どのような範唱音源を用いたらよいか、また音域はどのように設定すればよいかなど、歌い方の指導方法に具体的な示唆を与えることが考えられる。また、今回開発した範唱音源等を小・中学校の音楽科授業等の指導において活用することで、子どもの伝統的な歌唱の学習を円滑にし、より充実した学びを実現することが期待される。これら伝統的な歌唱の学習活動の充実は、鑑賞指導を含めた我が国や郷土の伝統音楽の学習全体によい影響を及ぼし、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と関わる資質・能力の育成に資するものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：An analysis of the singing style of children who practice traditional singing revealed that there was a large difference in singing style such as so-called kobushi compared to that of adult performers, and a difference in the singing range. Based on these analyzes and considerations, we constructed a singing model for traditional singing classes. We have developed teaching materials such as model singing sound sources for children and graphic scores. Then, using the teaching materials, we planned a practice based on the characteristics of children's singing, and conducted a class for verification at elementary schools. In those practices, it was suggested that using the model sung by the child makes it easier for the children to grasp how to use the voice and how to sing. In addition, we were able to confirm the effect of using the child's model singing for the vocal range when singing.

研究分野：音楽科教育

キーワード：教材開発 伝統的な歌唱 歌唱モデル 音楽授業

## 1. 研究開始当初の背景

現行の小学校及び中学校の学習指導要領には、民謡や長唄などの伝統的な歌唱を取り扱うことが示されている。それにも関わらず、以下のような理由から、十分な指導が行われているとはいえない状況にある。まず、教師の多くは西洋的な発声による歌唱に比べ、伝統的な歌唱については十分な知識や経験がないことにより、具体的にどのように指導を行ったらいいか、またどのような点に留意して指導すべきかわからないなどの不安を抱えている。また、授業においてどこまでできれば十分なのか、といった評価面でも確信をもつことができていることが考えられる。これらの要因の1つとして、指導用に用意されている範唱用の音源等が大人の演奏家が歌唱したものであることで、どこまで何を指導すべきかについて見通しがもちにくいということが推察される。つまり、学習者とモデルとのレベルの差異が大きいことについて検討する必要があると言えるが、伝統的な歌唱の稽古を受けている子どもの唄い方をモデルとすることで、指導について様々な示唆が得られるものと考えられる。

## 2. 研究の目的

日本の伝統的な歌唱の稽古を受けている子どもの唄い方について、発声やコブシ、唄う高さ(調子)を分析し、学校教育における伝統的な歌唱のための効果的なモデルを構築していくことを目的とした。具体的には以下の内容を行った。

- ・民謡、長唄、地唄等の稽古を受けている子ども(小・中学生)の唄を収集する。
- ・収集した唄の音源について、発声やコブシ、唄う高さ(調子)を分析し、特徴を明らかにする。
- ・伝統的な歌唱を稽古する子どもの唄を範唱とした場合の効果や課題等を検討する。
- ・学校教育において子どもが伝統的な歌唱を行う際のモデルや評価等、指導の在り方を示す。

## 3. 研究の方法

中学校学習指導要領にも歌唱教材として具体名が挙げられている民謡や長唄をはじめ、地唄等の稽古を受けている小・中学生の子どもに唄ってもらった音声を収録した。ここで収録した音声は分析に用いるだけでなく、授業実践における教材としても使用した。

収集した日本の伝統的な歌唱の稽古を受けている子どもの唄声の音声データについては、コンピュータ・ソフトウェアを用いたスペクトログラム等の音響分析を実施し、声質や装飾的旋律(コブシ)の状況、唄う高さ(調子)等についてのデータを得た。

また並行して、現時点において伝統的な歌唱の学習で用いられている範唱音源等について分析するとともに、指導を行っている実演家や指導者へのインタビューや、実際の指導実践のフィールドワークから、伝統的な歌唱の指導に関する現状と課題の把握を行った。

これら現状把握から浮き彫りになった課題等を踏まえ、収集した子どもの唄声の音響分析の成果をもとに、伝統的な歌唱を稽古する子どもの唄い方の特徴について明らかにするとともに、歌唱モデルとした場合の効果や課題を検討し、教育実践での効果的な活用法を考案した。

さらには作成した範唱音源や考案した指導法にもとづいて、小・中学校の音楽授業で実際に教育実践を試み、それらの成果と課題を検討し、伝統的な歌唱を稽古する子どもの唄を範唱とするこの意義などを発信していく。

## 4. 研究成果

### (1) 伝統的な歌唱の稽古を受けている子どもの歌唱の分析

伝統的な歌唱の稽古を受けている子どもの歌唱の分析として、CD音源や収録した音源について、主に民謡を子どもが唄っている音域やコブシなどの唄い方等の検討を行った。

#### 子どもが唄う民謡の音域に関する考察

まず、CD音源を対象に民謡を唄う子どもと成人の声域の比較を行った(長谷川、志民、櫻井 2022)。子どもの音源については民謡のコンクール入賞者のもの、成人については女性と男性の民謡歌手によるものを対象とし、音声分析ソフトウェアを補助的に用いながら、主に聴取によって音域を判定した。子どもの唄っている音域の上限に着目すると、先行研究等において最も換声点が高い例に見られた音域付近まで唄っていることがわかる。これらの音源で唄っている小学生や中学生は大会で入賞している子どもであるため、普段、民謡の稽古をしていない子どもと比較して、かなり高い音域を重い声で唄うことができるようになってきていると考えられる。そのことは、成人女性歌手と比較してもほとんど同じ音域で唄っているか、むしろそれ以上高い調子で唄っていることから示唆されよう。また、これらの音域は子どもが地声で歌うことができる一般的な上限の目安と考えられるA4を大きく超えている。よって、これらの音源を小学校や中学校での授業で範唱として用い、子どもが同じ音域で唄うことには慎重を期すべきであろう。

さらに、成人男性歌手の音源を用いることは、さらに注意が必要である。成人女性歌手が唄っている調子と子どもの唄っている調子との差は、大きいもので3半音だが、成人男性歌手の唄う調子との差は6半音から10半音と、大きな開きがある。子どもや女性の場合、男性が歌うキーのオクターブ上で歌うことが一般的であるため、男性による範唱を用いた場合、無意識的にオクタ

ープ上で唄うことも想定される。その場合、前項で確認した子どもの一般的な声域では、歌唱することが不可能と考えられることに留意する必要があることを指摘した。次に、これまで小・中学校において筆者がゲストティーチャーとして行ってきた民謡の歌唱実践で、実際に子どもたちが唄った音域について示し、その実践の結果から、子どもたちが無理なく民謡を唄うことができる音域の設定について考えた。民謡の「曲に合った歌い方」について指導方法を工夫する上で、発達段階に応じて適切な音域で唄えるよう配慮することが重要であることを指摘するとともに、子どもがどのような高さで唄ったらよいかを試しながら試行錯誤する中で、自分の声を生かしつつ「曲に合った歌い方」をするためには、どうしたらよいかということを追求するという学習の在り方を提案した。

民謡の歌唱収集した音源についてスペクトログラムなど詳細な分析を行った（長谷川、志民 2019）。中学 1 年生の女兒 A と小学 5 年生の女兒 B が唄う《駿河地搦唄》の歌唱を収録し、主にコブシに焦点を当てて、その歌い方について分析を行った。なお、女兒 A と B は姉妹で、二人とも小学校の低学年より民謡の稽古に通っているが、民謡の稽古歴がより長い女兒 A は、小学校の頃に全国的な民謡コンクールの少年少女の部においてチャンピオンになっている。

まず聴き取ったコブシをスペクトログラムと照らし合わせながら確認した。そして、女兒 A と女兒 B の歌唱について、成人男性が歌唱した音源とコブシについて、その種類と回数を比較した。女兒 B の歌唱に見られたコブシは全て女兒 A と同じ箇所でも出現していた。また、大半の箇所において、出現したコブシの種類も共通していた。しかし、女兒 B が用いているコブシの種類や出現回数は、女兒 A と比較すると圧倒的に少ないことがわかる。また、女兒 A や女兒 B が用いたコブシの種類も出現回数も、成人男性の歌唱と比較すると、はるかに限定的である。特に男性成人の歌唱で多く確認されたつき（瞬間的にピッチを上方へ上げたり、下方へ下げたりする）は、女兒 A の歌唱ではすりあげやゆりなどが用いられていた箇所で見られたが、フレーズの出だし等でアクセントを付ける効果があり、「地搦唄」の一同の動作を揃え、力を合わせる、という唄の役割に合致した唄い方をする上でふさわしいコブシである。

民謡の稽古に通う小・中学生が歌唱する《駿河地搦唄》の音源の分析を通して、コブシの使用については種類や回数は限定的であるが、子どもたちはコブシの生み出す効果やニュアンスをある程度把握しながら、そこで感受したことを基に、歌唱においては自らの技能で可能な形で表現していることが示唆されたと考える。

なお、民謡以外の長唄や箏曲、謡曲等の伝統的な歌唱についても、歌唱音源の収集を行った。

## (2) 伝統的な歌唱の指導に関するフィールドワーク及びインタビュー

### 伝統的な歌唱の指導に関するフィールドワーク

小・中学校や高等学校の児童生徒に対する民謡等の指導の実態を調査するため、富山県の五箇山地方において、民謡を指導する保存会や、指導を受けた子ども、そして学校の教員へのインタビューやフィールドワーク、アンケート調査等を実施した（長谷川、志民、櫻井 2022）。これらの分析等から、郷土の民謡の学習においては、学校における学習の環境づくりや地域との連携、子どもの主体性を導き出す学習の進め方などが、大きく影響していることが明らかとなった。具体的には、1 点目として、民謡の学習のための物的・人的環境が十分に整えられていたこと、2 点目として、保存会等の地域と学校の連携し、地域で一体となって取り組みが行われていたこと、3 点目として、保存会による指導だけでなく、教員の補助的支援によって発達段階等を考慮しながら子ども一人一人に合った指導・支援を行ったり、子ども同士で学び合ったりするようにしていることが挙げられる。

さらには、学習方法に着目すると、いずれの学校においても学習時に楽譜は用いず、あるいは用いていたとしても一般の民謡教室等で用いられているタブラチュア（図形楽譜）を使用している。指導者は声の出し方、コブシの入れ方に関しての具体的な歌唱指導はせず、模範となる「CD 音源」を「真似」し「さとらせる」学習方法をとっていた。耳から入り体得する学習方法は伝統音楽で古くから用いられており、これが学校教育での民謡学習には最適なようにも捉えることができるが、五箇山地区で育った子どもは幼少期から民謡を耳にし、自然と唄を覚えているという環境の影響を考慮する必要があることを指摘した。

### 伝統的な歌唱の指導に関するインタビュー

長唄、地歌箏曲の実演家を対象にインタビュー調査を行い、実演家が初学者に求める歌唱技能について情報収集を行った（長谷川、志民 2019）。インタビューは、歌舞伎でも活躍する長唄唄方の家元 A 師（男性）、京都在住の地歌演奏家 A 師（女性）、東京在住の地歌箏曲演奏家 B 師の 3 名に対して行った。3 名の実演家の回答はほぼ似た回答となった。歌の稽古において実演家が大切にしている点は、子どもに歌を稽古する上で求める技能として(1)歌唱に必要な十分な声を出せること、(2)楽曲（手ほどき）を楽譜や手本通り歌えること、大切にしたい学びとして、(1)初学者に細かな技巧や歌唱表現は求めない、(2)長唄や地歌箏曲を好きになること、を主眼にしていると考えられる。これは、日本音楽の学習には五線譜のように共通した楽譜がないことや、それゆえに師の演奏を真似ながら試行錯誤をしながら体得して行く学習方法が取られるために時間をかけて学習することが一般的なためである。加えて、似たような技法であっても種目や流派ごとに微妙に異なり、その微細な違いが種目や流派を決定づける大きな要因である音楽である

ことも理解する必要がある。

さらに、民謡の稽古や学校での指導を行っている2名の実演家・指導者にインタビューを実施し、子どもの唄い方の特徴や、子どもを指導する際に配慮している点などについて情報収集を行った。そこでは、子どもが民謡をはじめて歌唱する場合、まずは旋律の大まかな動きを捉えて唄えるようにすることを目指し、その上でコブシなどの細部についても、子どもが自分なりに試行錯誤しながら範唱に近付けるようにする、という指導の段階について示唆を得ることができた。

### (3)子どもの歌唱した音源を用いた授業モデルの構築と実践での検証

#### 民謡の授業モデルの構築と検証実践

それまでに行った伝統的な歌唱の学習についての分析及び考察をもとに、子どもの歌唱の特徴を踏まえた実践を計画し、小学校で検証のための授業を行った。

具体的には、富山県民謡「こきりこ」および北海道民謡「ソーラン節」について、子どもが歌唱している範唱の音源や図形楽譜などの開発した教材を用いて、小学校2校4クラスにおいて指導実践を試行した。それらの実践では、子どもが歌唱している範唱を用いたことにより、子どもにとって声の用い方や唄い方をつかみやすく、模唱しやすくなることが示唆された。また唄う際の音域についても、民謡らしい声で唄う上で適切な高さで、無理なく歌唱することが概ねできており、子どもの範唱を用いる効果を確認することができた。

また、静岡県静岡市に伝わる民謡「駿河地搦唄」について、民謡の稽古を受けている中学生による歌唱を収録した音声を用いて、複数の小学校の授業においてその音源を範唱として使用した歌唱指導実践を実施した。その結果、範唱の声の使い方やコブシに着目しながら、それらを模倣して歌おうとする児童の様子が見られた。

#### 作成した音源等、教材の公開

子どもが歌唱している範唱の音源や図形楽譜などの開発した教材をホームページで公開し、授業での指導に活用できるようにした。

この他に、長唄「勸進帳」を子どもが唄う音源等の収録を行ったが、これらについては、今後、引き続きデータの整理や分析、まとめ等が必要になると考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 長谷川 慎、志民 一成、櫻井 千晶	4. 巻 32
2. 論文標題 音楽授業における歌唱モデル構築のための伝統的な歌唱を稽古する子供の歌い方の分析（2）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 静岡大学教育実践総合センター紀要	6. 最初と最後の頁 32～40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14945/00028688	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 長谷川 慎、志民 一成	4. 巻 29
2. 論文標題 音楽授業における歌唱モデル構築のための伝統的な歌唱を稽古する子どもの歌い方の分析（1）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 静岡大学教育実践総合センター紀要	6. 最初と最後の頁 100～107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14945/00026358	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 本多佐保美、志民一成、長谷川慎	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開成出版	5. 総ページ数 114
3. 書名 日本音楽を学校でどう教えるか	

〔産業財産権〕

〔その他〕

・長谷川慎(2019)「外部機関との連携による日本の伝統音楽指導の取り組み - 伝統と文化の本質的な学びを目指して - 」日本教育大学協会全国音楽部門大学部会 第44回全国大会(2019年5月8日)

・子どもが歌唱している範唱音源及び図形楽譜等のホームページ公開 <http://www.shitami.site/takanari.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	長谷川 慎  (HASEGAWA Makoto)  (00466971)	静岡大学・教育学部・教授    (13801)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関